

第二次選定の検討対象種に係る情報

シロアゴガエル (<i>Polypedates leucomystax</i>)	1
コキーコヤスガエル (<i>Eleutherodactylus coqui</i>)	3
ウシガエル (<i>Rana catesbeiana</i>)	5
キューバアマガエル (<i>Osteopilus septentrionalis</i>)	8
ワニガメ (<i>Macrolemys temmincki</i>)	10
アカミミガメ (<i>Trachemys scripta</i>)	12
クーターガメ (アカハラガメ) 属 (<i>Pseudemys</i> spp.)	14
チズガメ属の3種 (<i>Graptemis</i> spp.)	16
ハナガメ (<i>Ocadia sinensis</i>)	18
チュウゴクスッポン (<i>Pelodiscus sinensis sinensis</i>)	20
アメリカスッポン属 (<i>Apalone</i> spp.)	22
グリーンイグアナ (<i>Iguana iguana</i>)	23
ヒョウモントカゲモドキ (<i>Eublepharis macrarius</i>)	25
アフリカツメガエル (<i>Xenopus laevis</i>)	27
ヨーロッパミドリヒキガエル等5種 (<i>Bufo</i> spp.)	28

シロアゴガエル (*Polypedates leucomystax*) に関する情報

原産地 東南アジア～南アジア（フィリピンからネパール、インド東部、中国南部、海南島）

定着実績 沖縄島及び周辺の島嶼（伊平屋島、伊是名島、伊江島、瀬底島、屋我地島、渡名喜島等）、宮古島及び周辺の島嶼（伊良部島、来間島、多良間島）、石垣島でも記録されている。

被害の事例

生態系に係る被害

- 生息環境や繁殖場所が在来のカエル類と重複しており、資源を巡る競合が生じることが懸念される（文献 ）。特に、同じく樹上性で体サイズも同程度であるアオガエル属 *Rhacophorus* の各種への影響が懸念される。
- 在来種からは発見されていない寄生性の線虫がシロアゴガエルの雄の生殖腺から確認されており、在来種への感染が懸念される（文献 ）。

被害をもたらしている要因

（１）生物学的要因

- 東南アジア原産であるが、環境への適応力が高く、自然林にも市街地周辺にも生息できる。
- カエル類としては比較的乾燥等に強く、資材に混入して移入されたとみられる。
- 分散能力も高いとみられ、沖縄島や宮古島では急速に分布を拡大した。

（２）社会的要因

- 混入しやすく、資材にまぎれて持ち込まれる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 四肢の指に発達した吸盤をそなえる点ではアオガエル属と類似するが、体色の違いや前肢の水かきの有無等で区別できる。
- 同じ属のものは日本にいない。シロアゴガエル属は 28 種を含み、台湾から東南アジア、インド、スリランカにかけて分布する。

その他の関連情報

- ベット等としての需要や流通がわずかにある。

主な参考文献

太田英利, 2002. シロアゴガエル. In 外来種ハンドブック, p107. 知人書館.

Hasegawa H. and M. Asakawa, 2004. Parasitic nematodes recorded from amphibians and reptiles in Japan. *Current Herpetology*, 23:27-35.

Polypedates leucomystax; *Amphibians Species of the World*

<http://research.amnh.org/herpetology/amphibia/references.php?id=20152>

Ota H. M. Toda, G. Masunaga, A. Kikukawa and M. Toda, 2004. Feral Populations of Amphibians and Reptiles in the Ryukyu Archipelago, Japan. *Global Environmental Research*, 8(2)133-143.

コキーコヤスガエル (*Eleutherodactylus coqui*) に関する情報

原産地 プエルトリコ

定着実績 国内ではなし。国外ではハワイ、バハマ、ドミニカ共和国、ガラパゴス諸島、フロリダ、バージン諸島などに侵入している。

被害の事例

生態系に係る被害

- 具体的な被害は想定されていないが、夜行性の捕食者として昆虫やクモ類に影響が及ぶとされる。試算によれば、1ヘクタール1夜あたり114,000匹の無脊椎動物が捕食される(文献)。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 両生類としては例外的な生活史を持ち、オタマジャクシの期間を持たずに湿った地上で卵から直接にカエルが孵化する(直接発生)。このため、水域がなくても湿った環境があれば繁殖することができる。
- 繁殖力が旺盛で、雨期を中心に、16~41個(平均28個)の卵を約8週間おきに年に4~6回産出する。たった約8週間で卵から成熟まで達する。

(2) 社会的要因

- 混入しやすく、資材にまぎれて持ち込まれる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 中南米に固有の科に属しており、日本には近縁種はいない。アイフィンガーガエル等、緑色にならない樹上性のカエルにやや似ている。
- コヤスガエル属 *Eleutherodactylus* は両生類の中で最も多くの種を含む属で、いずれも直接発生する。
- オンシツガエル *E. planirostris* は外見が似ており、外来種となった例もあり(フロリダ、ルイジアナ、ハワイ等に定着) 同様に注意すべき種といえる。

その他の関連情報

- ハワイでは鳴き声が大きく不快であることから防除の対象とされる。鳴き声は、0.5m離れた所で100デシベルであるとの報告がある。
- ハワイでは防除の試みがなされている。手で捕獲する他、カフェインの水溶液を散

布する方法が試みられている。

- フロリダではかつて定着したものの、1977年から1978年にかけての寒い冬を越すことができずに絶滅したとの記述もある。
- ペット等としての需要や流通はほとんどないものと見なされる。

主な参考文献

Eleutherodactylus coqui (amphibian) ; ISSG Database

<http://www.issg.org/database/species/ecology.asp?si=105&fr=1&sts=sss>

Eleutherodactylus planirostris (Cope, 1862) ; Amphibians Species of the World 3.0

<http://research.amnh.org/herpetology/amphibia/references.php?id=10094>

Behler J. L. & F. W. King 1979. The Audubon Society Field Guide to North American Reptiles and Amphibians. Alfred A. Knopf.

戸田光彦, 1993. 地上での発生. 上野俊一他監修・動物たちの地球98:5-56-57.

ウシガエル (*Rana catesbeiana*) に関する情報

原産地 アメリカ東部・中部、カナダ南東部

定着実績 北海道南部から沖縄県、小笠原諸島に至る広い範囲に定着している。

被害の事例

生態系に係る被害

- 京都市の深泥池では、本種が昆虫、甲殻類、魚類などの様々な動物を捕食していることが報告されている(文献)。クサガメの幼体を捕食した記録もある(文献)。
- 秋田県において、ウシガエルが侵入・定着した池で、かつては生息していたモリアオガエルが見られなくなったとの報告がある(文献)。
- アメリカ合衆国西海岸に本種が導入され、同属のアカアシガエル *R. aurora* や他のカエル類が捕食、競合により危機的な状態に追い込まれている(文献)。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 大型で極めて捕食性が強く、口に入る大きさであれば、ほとんどの動物が餌となる。

(2) 社会的要因

- 1920年代からタンパク源として導入され、1950年から1970年にかけて大量に(年間数百ト)輸出されたが、現在ではごく一部の地域を除くと経済的な価値を失った。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 日本のみならずアメリカ合衆国でも最大のカエルで、頭胴長 183mm に達する。水生傾向が強く、後肢の水かきはよく発達する。
- 幼生も大型で、全長 150mm になる。
- 貪欲な捕食者で、昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食する。
- 系統分類学的には、アメリカ合衆国に生息する比較的大型で水生傾向の強いカエル類が「ウシガエル種群」としてまとめられる。この種群には、ウシガエルの他にブロンズガエル *R. clamitans*、ブタゴエガエル *R. grylio*、リバーフロッグ *R. heckscheri*、カーペンターフロッグ *R. virgatipes* の 5 種が含まれる。

その他の関連情報

- 食用として世界各地に導入され定着している（アメリカ合衆国西部、ヨーロッパ、西インド諸島、韓国など）。
- ヨーロッパ諸国、韓国などでは輸入が禁止されている。
- 食用、実験用として少数の需要があり、少人数であるが本種の捕獲を収入源にしている。
- 食用として、生きた状態で中国から輸入されている。

主な参考文献

- Adams, M. J. (1999). Correlated factors in amphibian decline: exotic species and habitat change in Western Washington. *Journal of Wildlife Management*. 63(4): 1162-1171.
- Adams, M.J. (2000). Pond permanence and the effects of exotic vertebrates on anurans. *Ecological Applications*.10(2): 559-568.
- Duellman, W. E. and S. S. Sweet (1999). 2.Distribution Patterns of Amphibians in the Nearctic Resion of North America. In : Duellman(ed.) *Patterns of Distribution of Amphibians*. 31-110. The Jones Hopkins University Press.
- Graves, B. M. and Anderson, S. H. (1987) Habitat suitability index models: bullfrog. U.S. Fish Wildl. Serv. Biol. Repo. 82(10.138), 22p.
- 長谷川雅美(1999).ウシガエルの秘められた歴史.平成11年度特別展カエルのきもち展示解説書 100-107.千葉県立中央博物館.
- 平井利明 (2003) ウシガエルに食べられていたクサガメについて. 関西自然保護機構会誌 25(1):3-5.
- Hirai, T. (2004) Diet composition of introduced bullfrog, *Rana catesbeiana*, in the Mizorogaike Pond of Kyoto, Japan. *Ecological Research*, 19:375-380.
- Kiesecker, J. M. and A.R. Blaustein, A.R. (1997). Population differences in responses or red-legged frogs (*Rana aurora*) to introduced bullfrogs. *Ecology*. 78(6): 1752-1760.
- Kiesecker, J.M. and Blaustein, A. R. (1998). Effects of introduced bullfrogs and smallmouth bass on microhabitat use, growth, and survival of native Red-Legged frogs (*Rana aurora*). *Conservation biology*. 12(4): 776-787.
- Kiesecker, J.M., Blaustein, A. R. and Miller, C. L. (2001). Potential mechanisms underlying the displacement of nativered-legged frogs by introduced bullfrogs. *Ecology* 82(7): 1964-1970.
- Kupferberg, S.J. (1997). Bullfrog (*Rana catesbeiana*) invasion of a California river: The role of larval competition. *Ecology* 78(6): 1736-1751.
- Lawler, S.P., Dritz, D. Strange, T. and Holyoak, M. (1999). Effects of introduced

mosquitofish and bullfrogs on the threatened California red-legged frog.
Conservation biology. 13(3): 613-622.

本郷敏夫(1996)両生類の分布に及ぼすウシガエルの影響. 秋田自然史研究, 32:16-18.

前田憲男・松井正文 (1999) 改訂版日本カエル図鑑. 文一総合出版. 223pp.

日本生態学会(編) (2002) 外来種ハンドブック. 地人書館, 390pp.

キューバアマガエル (*Osteopilus septentrionalis*) に関する情報

原産地 キューバ、ケイマン諸島、バハマ諸島

定着実績 国内ではなし。国外ではハワイ、フロリダ、バージン諸島、コスタリカなどに侵入している。

被害の事例

生態系に係る被害

- 大型で口が大きく、さまざまな動物を捕食する。昆虫、他の脊椎動物からトカゲ類、カエル類を捕食し、鳥類までも捕食しうる。(文献)
- 他のカエル類との幼生の競争も懸念される。フロリダ半島原産のナンブヒキガエル、アメリカアマガエルの幼生は、外来種である本種の幼生によって成長が阻害されている。(文献)

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 適応力が高く、ハワイでは標高 900mまで分布する。
- アマガエルとしては大きく成長する。頭胴長は雄で 8.5cm、雌で 10.2cm 程度までだが、フロリダにおいては 16.5cm にも達した雌が記録されている。
- 繁殖期が長く、ハワイではほぼ 1 年中繁殖できる。

(2) 社会的要因

- 混入しやすく、資材にまぎれて持ち込まれる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 中南米に固有の属に属しており、日本には近縁種はいない。頭部の皮膚と頭骨が癒合しごつごつして見えることから、キューバズツキガエルと呼ばれることもある。
- 背面や四肢に縦条を持つ個体があり、シロアゴガエルにやや似ているが、大型になること、背面の皮膚にいぼが多いことで区別できる。

その他の関連情報

- ベット等としての需要や流通がわずかにある。

主な参考文献

Osteopilus septentrionalis; Amphibians Species of the World

<http://research.amnh.org/herpetology/amphibia/references.php?id=4983>

Smith K. G. 2004. Effects of nonindigenous tadpoles on native tadpoles in Florida: evidence of competition. *Biological Conservation* 123:433-441.

McKeown S. 1996. *A Field Guide to Reptiles and Amphibians in the Hawaiian Islands*. Diamond Head Publishing.

ワニガメ (*Macrolemys temmincki*)に関する情報

原産地 アメリカ合衆国南東部

定着実績 定着事例はない。ただし、各地で逸出個体がしばしば見られる。

被害の事例

生態系に係る被害

- 大型に成長し、魚類を中心にさまざまなものを捕食することから、もし定着すると魚類等に大きな影響が及ぶと想定される。

人の生命又は身体に係る被害

- 咬みつかれると大怪我をする可能性はあるが、カミツキガメと異なり待ち受け型の捕食行動をとるため、危険に遭遇する機会は少ないと考えられる。

農林水産業に係る被害

- カミツキガメ同様、コイやフナ等の淡水魚を対象とした漁具に掛かり、漁具の破壊、漁獲物を食害する被害が生じる可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 肉食に偏った雑食性で、魚類の他、両生類、甲殻類などを広く採食する。在来種のカメ類と、食物や日光浴場所、産卵・越冬場所が類似し競合する。また、カメ類が捕食の対象となることも想定される。
- 多数の卵を産出する（在来の淡水産カメ類よりも産卵数が多く、一腹卵数は8～52個に達する）。

(2) 社会的要因

- 本種の幼体は現在でもペット用としてわずかに流通している。
- 大型に成長し動きが少ないため、飽きられたり持て余されたりしやすく、遺棄が続いているとみられる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 淡水産のカメ類としてはきわめて大きくなり、最大で背甲長66cm、体重80kgに達する。
- 類似の種はないが、カミツキガメがやや似ている。

その他の関連情報

- カミツキガメと同様に、本種を規制した場合に都市部を中心に多数が遺棄される可能

性がある。ただし、カミツキガメに比べると価格がはるかに高く、かつての流通量もずっと少なく、飼育されている個体数も少ないと予測されることから、多数がまとまって遺棄される状況はほとんどないと予測される。

- 長期飼育はかなり困難で、カミツキガメと異なり、日本国内における飼育下繁殖の事例はごくわずかである。ペット用に流通している個体も、原産地での野外採集個体とみられる。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

アカミミガメ (*Trachemys scripta*)に関する情報

原産地 アメリカ合衆国から南米大陸北西部まで（約 16 の亜種に分けられる）

定着実績 亜種ミシシippアカミミガメ *T. s. elegans* が全国に定着している。また、基亜種キバラガメ *T. s. scripta* も逸出個体がしばしば見られる。

被害の事例

生態系に係る被害

- 高密度に生息し、在来のカメ類と資源（例えば日光浴の場所や食物等）が重複し、またさまざまな動植物を採食することから、定着地域では在来のカメ類や水生植物、魚類、両生類、甲殻類等に大きな影響を及ぼしていると想定される（文献 ）。
- 最も大量に（年間数十万匹から 100 万匹）輸入されている爬虫類である。消耗品扱いされ、多数の個体が遺棄され、逸出しており、わが国で最も普通に見られるカメとなっている。

被害をもたらしている要因

（１）生物学的要因

- 雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫や水鳥の死体などを広く採食する。在来種のカメ類と、食物や日光浴場所、産卵・越冬場所が類似し競合する。
- 繁殖能力が高い（在来の淡水産カメ類よりも産卵数が多く、1 回に 20 個を超える卵を産むことがある。年に数回産卵する）。
- 頑健で汚染にも強く、都市部のきわめて汚れた河川でも生存できる。

（２）社会的要因

- 本種の幼体は現在でもペット用として大量に流通しており、安価で販売されている。年間の輸入量は数十万から百万匹と推定される。
- 飼育は容易であるが、大型に成長し攻撃的になるため、飽きられたり持て余されたりしやすく、大量の遺棄が続いている。
- 1975 年頃のサルモネラの感染報道がなされた際にまとまった遺棄が起こったと言われる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 雄より雌の方が大型になる。雄は背甲長 20cm、雌は 28cm、2.5kg 程度まで成長し、在来のイシガメ（1kg 前後）やクサガメ（2kg 弱）に比して大型である。
- 頭部の両脇に目立つ赤い斑が見られる。雄成体では不明瞭になることもある。日本

在来の類似種はいない。

その他の関連情報

- 輸入と遺棄の禁止が野外における個体数の低減に結びつくとみられ、輸入禁止等の対策の効果は高いと推定される。一方で、本種を規制すれば、都市部を中心に大量に遺棄される可能性がある。
- 飼養者に子供が多くいるとともに、学校や幼稚園等における飼育もなされていることから飼養状況を把握しづらく、規制を徹底させることが現時点では困難である。飼養者に対する普及啓発が重要である。
- 世界的に見ても、最も流通量の多い爬虫類である。
- 南アフリカではすでに輸入が禁止されており、2003年より韓国でも輸入が禁止された。ヨーロッパ諸国でも輸入を禁止にする動きがある。
- アメリカ合衆国の連邦法では甲長4インチ以下の子ガメの販売が禁止されている。ただし、輸出用に限り流通は認められている。
- 本種の規制により、クサガメ、アカミミガメ以外のスライダークラゲ属 *Trachemys*、クーターガメ属 *Pseudemys* のようなカメ類が代価のペットとして大量に流通するようになる可能性がある。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

太田英利 (1995) 琉球列島における爬虫・両生類の移入, 沖縄島嶼研究, 13:63-78.

日本生態学会(編) (2002) 外来種ハンドブック. 地人書館, 390pp.

矢部 隆 (2003) ミシシippアカミミガメ 日本で最もよく見られるカメ-. 滋賀県琵琶湖博物館企画展示資料: 72-73.

クーターガメ（アカハラガメ）属（*Pseudemys* spp.）に関する情報

原産地 アメリカ合衆国東部（約 5 種を含む）

定着実績 定着はしていないが、各種の逸出個体がしばしば見られる。コンキンヌマガメ *P. cincinna*、フロリダアカハラガメ *P. nelsoni* 等の流通が多く、これらの逸出が多いものと推測される。

被害の事例

生態系に係る被害

- 定着して高密度に生息するようになった場合、在来のカメ類と資源（例えば日光浴の場所や食物等）が重複し、またさまざまな動植物を採食することから、定着地域では在来のカメ類や水生植物、魚類、両生類、甲殻類等に影響を及ぼす可能性がある。
- 年間数十万匹から 100 万匹も輸入されているアカミミガメと、生態・形態が類似しており、もしアカミミガメの輸入や飼養が規制された際には代替利用される可能性がある。

被害をもたらしている要因

（１）生物学的要因

- 雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫や水鳥の死体などを広く採食する。在来種のカメ類と、食物や日光浴場所、産卵・越冬場所が類似し競合する。
- コンキンヌマガメやフロリダアカハラガメは頑健で汚染にも強く、都市部の汚れた河川でも生存できると考えられる。

（２）社会的要因

- 本種の幼体は現在でもペット用として流通しており、比較的安価（数千円以下）で販売されている。
- 飼育は容易であるが、大型に成長するため、飽きられたり持て余されたりしやすく、遺棄が続いているものとみられる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 比較的多く流通しているフロリダアカハラガメの場合、最大背甲長 34cm と、ミシシippアカミミガメよりもかなり大きくなる。
- 頸部に黄色の縦条があるものが多く、アカミミガメにやや似ている。成体の背甲はアカミミガメよりもドーム状に盛り上がる。ミシシippアカミミガメに見られる頭

部の両脇の赤色斑はない。成体では不明瞭になることもある。

- 生態もアカミミガメに類似するが、成体はより草食傾向が強く、水生植物を多く採食する。
- 日本在来の類似種はいない。

その他の関連情報

- 他のカメ類と同様、本種を規制すれば、都市部を中心に多数が遺棄される可能性がある。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

チズガメ属の3種 (*Graptemis* spp.)に関する情報

原産地 ニセチズガメ *G. pseudogeographica*、フトマユチズガメ *G. ouachitensis*(サ
ビンチズガメ *G. o. sabinensis*を含む)、ミシシッピチズガメ *G. kohnii*の
3種。いずれもアメリカ合衆国東部が原産。チズガメ属は北米固有の属で、
約11種を含むが、上記3種はいずれも比較的広く分布する。

定着実績 定着はしていないが、各種の逸出個体がしばしば見られる。

被害の事例

生態系に係る被害

- 定着して高密度に生息するようになった場合、在来のカメ類と資源(例えば日光浴の場所や食物等)が重複し、またさまざまな動植物を採食することから、定着地域では在来のカメ類や水生植物、魚類、両生類、甲殻類等に影響を及ぼす可能性がある。
- 年間数十万匹から100万匹も輸入されているアカミガメと、生態・形態がやや類似しており、もしアカミガメの輸入や飼養が規制された際には代替利用される可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫などを広く採食する。在来種のカメ類と、食物や日光浴場所、産卵・越冬場所が類似し競合する可能性がある。

(2) 社会的要因

- 本種の幼体は現在でもペット用として流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- いずれの種も雄よりも雌の方がずっと大きくなる。雌の場合、最大背甲長25cm程度に成長する。頸部に細かい黄色の縦条があるものが多い。
- 日本在来の類似種はいない。

その他の関連情報

- 他のカメ類と同様、本種を規制すれば、都市部を中心に多数が遺棄される可能性がある。
- 現在の流通量から見ると、すぐに定着するほどではないと考えられる。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

ハナガメ (*Ocadia sinensis*) に関する情報

原産地 台湾、中国南部、ベトナム北部

定着実績 定着はしていないが、逸出個体の目撃例がある。

被害の事例

生態系に係る被害

- 飼育下でクサガメとの交雑と思われる例が知られる（文献 ）。定着して高密度に生息するようになった場合、同亜科の在来種（クサガメ、ニホンイシガメ、ヤエヤマイシガメ、セマルハコガメ、リュウキュウヤマガメ）との交雑が懸念される。
- 在来のカメ類と資源（例えば日光浴の場所や食物等）が重複し、またさまざまな動植物を採食することから、定着地域では在来のカメ類や水生植物、魚類、両生類、甲殻類等に影響を及ぼす可能性がある。

被害をもたらしている要因

（１）生物学的要因

- カメ類は属間交雑を起こしやすいことが知られている。本種はヌマガメ科の在来種（クサガメ、ニホンイシガメ、ヤエヤマイシガメ、セマルハコガメ、リュウキュウヤマガメ）と同じ亜科に属しており、いずれの種とも交雑のおそれがある。とりわけ、水生傾向の強いクサガメ、ニホンイシガメ、ヤエヤマイシガメとの交雑が懸念される。
- この亜科のカメとしては割に緯度の高いところ（台湾等）まで分布しており、日本の気候に適応できると考えられる。
- 雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫などを広く採食する。在来種のカメ類と、食物や日光浴場所、産卵・越冬場所が類似し競合する可能性がある。

（２）社会的要因

- 本種の幼体は現在でもペット用として流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 最大で背甲長 24cm 程度に成長する。頸部に黄色と黒色の細かい縦条がある。
- 日本在来の類似種はいない。

その他の関連情報

- 他のカメ類と同様、本種の飼育を規制すれば、都市部を中心に多数が遺棄される可能性がある。
- ヌマガメ科イシガメ亜科のカメ類はいずれも日本在来種と交雑するおそれがある。本種以外にも、日本に定着した場合に生態系に被害をもたらさうる種がいると考えられ、検討を要する。
- 現在の流通量から見ると、すぐに定着するほどではないと考えられる。

主な参考文献

千石正一(1997) チャンプルーReptiles in 沖縄. 月刊アクアライフ1997年10月号. 144-149.

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) Turtles of the World. Smithsonian Institution Press, 313pp.

チュウゴクスッポン (*Pelodiscus sinensis sinensis*)に関する情報

原産地 ロシア、中国、ベトナム、台湾、海南島

定着実績 沖縄諸島(沖縄島、久米島、伊平屋島)、南大東島、八重山諸島(石垣島、与那国島、西表島)。別亜種ニホンスッポン *P. s. japonicus* が本州、四国、九州に自然分布する。

被害の事例

生態系に係る被害

- ニホンスッポンの分布域内に定着した場合、遺伝的な攪乱が懸念される。
- ニホンスッポンと食物等が重複し、魚類や二枚貝を捕食することから、定着地域では在来のカメ類や魚類、二枚貝等に影響が及ぶ可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 在来の亜種と交雑する可能性がある。
- ベトナムから中国、ロシアに至る広い地域分布しており、日本の気候に適応できると考えられる。
- 魚類や貝類を中心にさまざまな動物を捕食する。

(2) 社会的要因

- 食用、ペット用として流通しうる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 分類は確定的なものではなく、ニホンスッポンをチュウゴクスッポンの同物異名と見なす考えもある。ただし、日本本土の集団と台湾や香港の集団の間には比較的明瞭な遺伝的差があるとされる。
- ニホンスッポンほどには大きくなり、背甲長 25cm 程度に成長する。

その他の関連情報

- スッポンは南西諸島に広く分布するが、これらは全て人為分布と考えられている。奄美群島以北には日本本土から持ち込まれたニホンスッポンが、沖縄諸島以南には台湾などから持ち込まれたチュウゴクスッポンがそれぞれ定着しているとされる。
- 現在、食用として日本本土で養殖されているスッポンはほとんどニホンスッポンとされる。チュウゴクスッポンの利用の実態については不明であるが、中華料理の食

材等としての流通がある可能性がある。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

Sato H. and H. Ota, 1999. False biogeographical pattern derived from artificial translocation of organisms: A case of soft-shelled turtle, *Pelodiscus sinensis*, in the Ryukyu Archipelago, Japan. In: Ota (ed) , *Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity and Conservation*, pp317-334. Elsevier Science.

アメリカスッポン属 (*Apalone* spp.)に関する情報

原産地 アメリカ合衆国東部。3種を含む。

定着実績 国内では定着していない。トゲスッポン *A. spinifera* がアメリカ合衆国西海岸に定着している。

被害の事例

生態系に係る被害

- 大型になり、在来のカメ類と食物等が重複することから、定着地域では在来のカメ類や魚類、両生類、甲殻類、水生植物等に影響が及ぶ可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 温帯まで分布しており、日本の気候に適応できると考えられる。
- 魚類や甲殻類、水草等を中心にさまざまなものを採食する。
- フロリダスッポン *A. ferox* は背甲長 60cm、トゲスッポンは背甲長 50cm にも達し、在来の淡水産カメ類よりも大型になる。

(2) 社会的要因

- ペット用として流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- ニホンスッポンにやや似るが、甲の形態や模様により区別できる。

その他の関連情報

- 流通はそれほど多くないと考えられる。なお、食用としての流通の可能性もあるため、引き続き情報を収集することが必要である。

主な参考文献

Ernst, C. H. and R. W. Barbour (1989) *Turtles of the World*. Smithsonian Institution Press, 313pp.

LaRoe, E.T., G.S. Farris, C.E. Puckett, P.D. Doran, and M.J. Mac, eds. (1995) *Our living resources: a report to the nation on the distribution, abundance, and health of U.S. plants, animals, and ecosystems*. U.S. Department of the Interior, National Biological Service, Washington, DC. 530 pp.

グリーンイグアナ (*Iguana iguana*)に関する情報

原産地 中南米（メキシコからパラグアイ）、西インド諸島。

定着実績 国内における定着の確実な報告はないが、石垣島で繁殖しているとの新聞報道もある。国外ではフロリダ半島やハワイ等に定着している。

被害の事例

生態系に係る被害

- きわめて大型になり、花や果実等の植物質や昆虫などを摂食することから、高密度に生息すると植生や大型昆虫に影響が及ぶ可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 雑食性であり、植物質を中心にさまざまなものを採食する。
- 最大全長 180cm にも達し、在来のトカゲ類よりもはるかに大型になる。

(2) 社会的要因

- ペット用として幼体が多数流通している。飼育は難しくないが、きわめて大型になるため大がかりな設備が必要となり、特に雄は気が荒くなる個体も多いことから、持て余されて多くの個体が遺棄されていると考えられる。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 日本に類似した種はいない。イグアナ科及びアガマ科（キノボリトカゲ科）にはやや類似した種がいるが、鱗の形態等から区別できる。

その他の関連情報

- トカゲ類の中ではきわめて流通量が多い種である。
- 日本において同様の生態的地位を占める動物は想定されない。もともと熱帯域に分布しており、日本に定着できるかどうか不明であるが、南西諸島や小笠原では定着の可能性はある。
- 高木の花や果実を摂食することから、特定の樹種が食害を受ける可能性がある。

主な参考文献

Townsend, J. H., K. L. Krysko, and K. M. Enge. (2003) Introduced iguanas in southern Florida: a history of more than 35 years. *Iguana* 10:111-118.

McKeown, S. (1996) A field guide to reptiles and amphibians in the Hawaiian islands, Diamond Head Publishing, Inc. California, 172p.

ヒョウモントカゲモドキ (*Eublepharis macrarius*)に関する情報

原産地 イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド北西部

定着実績 国内外における定着は報告されていない。

被害の事例

生態系に係る被害

- 病原性の高い原虫クリプトスポリジウム *Cryptosporidium* sp. に感染した個体が多く輸入されており、在来爬虫類への感染、蔓延が懸念される。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 飼育下でクリプトスポリジウムに感染しても、比較的長期間生存する。
- クリプトスポリジウムはトカゲ類、ヘビ類、カメ類などに広く感染する。なお、在来の希少種オビトカゲモドキは感染にきわめて弱く、致死率が高い。
- よって、クリプトスポリジウムに感染したヒョウモントカゲモドキが野外に逸出した場合、オビトカゲモドキをはじめとした多くの在来爬虫類に深刻な影響をもたらすおそれがある。

(2) 社会的要因

- ペット用に多数が流通しており、色彩変異の品種が作出されており、ペット用のトカゲ類として最もポピュラーな種である。
- アメリカで養殖された個体が多数輸入されているが、近年、アメリカでクリプトスポリジウム感染が流行しており、感染個体が輸入されるケースが報告されている。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 徳之島と沖縄諸島に分布するクロイウトカゲモドキがやや類似するが、体色等から容易に区別できる。

その他の関連情報

- トカゲ類の中では流通量が多い種である。ただし乾燥地に生息するため、日本に定着するおそれは低いと考えられる。
- クリプトスポリジウム感染症の問題は、本種に限らず、輸入される爬虫類に共通して懸念される。
- 南日本では、ホオグロヤモリ等の住家性のヤモリ類が生息するが、これが飼育下の

クリプトスポリジウム感染個体と接触して感染し、原虫を野外に運ぶ可能性が指摘されている。

主な参考文献

Terrell, S. P., Funk., E. W. and Richard, S. (2003) Proliferative enteritis in leopard geckos (*Eubleparis macularius*) associated with *C. ryptosporidium* sp. infection, J. Zoo and Wildlife Medicine, 34:69-75.

アフリカツメガエル (*Xenopus laevis*)に関する情報

原産地 アフリカ中南部

定着実績 国内における定着の確実な報告はないが、関東地方に定着しているとの情報もある。国外ではイギリス、アメリカ合衆国カリフォルニア州、チリ、メキシコ、ジャワ島、南大西洋アセンション島等に定着している。

被害の事例

生態系に係る被害

- 競合や捕食により水生動物が被害を受ける可能性がある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- 温帯域に分布しており、実験室でも無加温で飼育でき、日本の気候に適応できる。
- 完全に水生のカエルであり、幼生はプランクトンを、変態後は水生昆虫等の小動物を採食する。日本には同様の生態的地位を占める動物が見あたらない。

(2) 社会的要因

- 実験動物として大量に生産され流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 在来種に似たカエルはいない。

その他の関連情報

- 世界各地に定着しており、日本でも定着のおそれが高い種といえる。
- 利根川水系等で見られるとの情報があり、実態調査の必要性が高い。
- 日本においては、全ての両生類の中で最も多く利用されている種のひとつと考えられる。実験動物として重要であり、ペット用の流通もある。国内生産された個体が出回っていると見られるが、生産、流通、利用の実態を明らかにする必要がある。

主な参考文献

Beebee, T. and Griffiths, R. (2000) Amphibians and reptiles, a natural history of the British Herpetofauna, HarperColling Publishing, Ltd/ London, 270p.

Measey, G.J. (1998) Diet of feral *Xenopus laevis* (Daudin) in South Wales, J. Zool., Lond., 246:287-298.

ヨーロッパミドリヒキガエル等5種 (*Bufo* spp.)に関する情報

原産地 ヨーロッパミドリヒキガエル *B. viridis*: ヨーロッパ
テキサスミドリヒキガエル *B. debilis*: 合衆国カンザス州からメキシコ湾岸
ナンブヒキガエル *B. terrestris*: 合衆国東南部
ガルフコーストヒキガエル *B. valliceps*: アメリカ合衆国、メキシコからコ
スタリカにかけて
ロココヒキガエル(キャハンヒキガエル) *B. paracnemis*: 南米

定着実績 国内外における定着は報告されていない。

被害の事例

生態系に係る被害

- オオヒキガエル等と同様、捕食や競合、皮膚から分泌される毒による影響などをもたらすおそれがある。

被害をもたらしている要因

(1) 生物学的要因

- いずれの種も温帯域に分布しており、日本の気候に適応できると考えられる。
- オオヒキガエルの他にも、国内外来種であるニホンヒキガエル、ミヤコヒキガエルが島嶼部に定着しており、日本の島嶼はヒキガエル属が定着しやすい条件を備えている可能性がある。

(2) 社会的要因

- 上記の5種はペット用にやや多く流通している。

特徴ならびに近縁種、類似種などについて

- 在来のヒキガエル類とやや類似するが、体色や大きさ、耳腺の特徴などから区別できる。

その他の関連情報

- 現在のところ、これらの種が外来種となった事例は報告されていないが、予防的観点から、影響について適切な評価が必要な種といえる。
- チウカヒキガエル *B. gargarizans gargarizans*、ヨーロッパヒキガエル *B. bufo*、アメリカヒキガエル *B. americanus* 等、他の温帯産ヒキガエルも含めて評価を検討する必要がある。

主な参考文献

Brauer K. (1991) Kroten. Urania-verlagsgesellschaft mbH, 190p.

Bufo Laurenti, 1768; Amphibian Species of the World 3.0

<http://research.amnh.org/herpetology/amphibia/references.php?id=885>